

市立函館博物館 友の会々報

No. 65

世界史の中の箱館

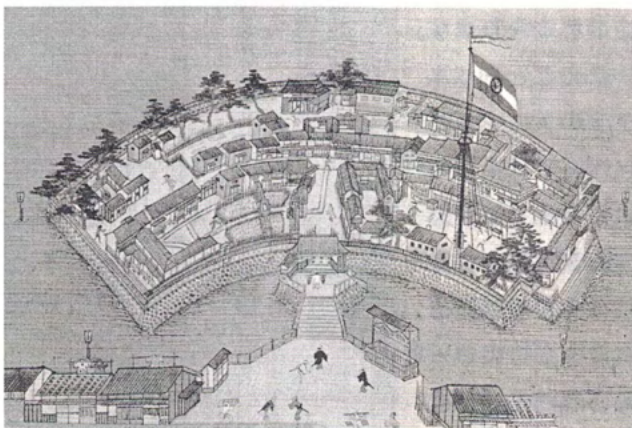
理事 吉田 豊

(はじめに)

世界史に疎い私は、なぜ日本の出島にオランダが来ていたのか、いつも気になっていました。オランダは小国であり、なぜ大国のイギリス等ではなかったのかと言う、どこか深味の無い、ありきたりの疑問です。

小国と思っていたオランダが世界の覇権国であったというのですから、もう一度世界史を考えてみようというお話をしたいと思います。

そのオランダ時代から世界史を遡って見ていくと、歴史は何処として切れ目が無く、つながっているという感を改めて持ちました。ですから、なぜペリーが箱館に来たかをお話するのに、マルコ・ポーロ辺りから始めるという、何とも回りくどい話をするようになりました。



江戸時代後期の長崎出島 (丸山応挙筆)



講演する吉田豊氏

1. 有珠善光寺の見学

有珠の善光寺を見学したことがあります。826年に信州善光寺の像を模して本尊にした由縁で、後になって善光寺という名になりました。道内最古の古刹です。1613年に松前藩祖・慶広が砂原から船で渡り、松前藩の祈願所になっています。18世紀末になると日本近海が騒がしくなります。1802年、11代将軍・家斉が東蝦夷地を直轄地にして箱館に蝦夷奉行所を置き北辺の防備をさせます。洞爺湖近くに英船が寄って来ています。もちろんロシアも南下しました。

幕府は3つの官寺を造っています。伊達に善光寺、様に等澗院、厚岸に国泰寺です。官寺はいわば国策の寺です。警備に当たっていた南部や津軽藩士の心の



有珠善光寺

安定や葬儀が必要でしたが、主な目的はキリスト教対策でした。アイヌびとのキリスト教改宗を防ぐ目的です。千島にロシアが進攻していましたから、択捉島などを巡回してアイヌびとを本堂に集め、異教の禁止をしました。

1799年、近藤重蔵が択捉島から持ち帰った「十文字木」は十字架のようなもので、蝦夷におけるキリシタン問題を高めました。蝦夷地は新しい寺院の建築は元禄年間から禁じられていましたから、官寺創建はこれを破ることになりました。同寺の宝物館には印刷用版木が展示されています。そこには仏教の教えをアイヌ語に訳して彫ってありました。和語と並行してルビのようにアイヌ語が並んでいます。例えば極楽浄土をピリカ・コタン（美しい国土）というように。こうしてアイヌびとのキリスト教化を防いだのです。やや人里離れた小さな寺で思いがけず、このような事にぶつくと、歴史散歩の面白さが増します。

このことから思い浮かぶのはアナロジー（類比）という歴史の見方です。過去にあった事柄を比べ合わせ、似ていることを結び付けて考えるということです。あの状況に似ているということです。一つの美術品などを目にしますとその美しさや珍しさに目を奪われるものです。単体であるその物を見て評価し、ややもするとそれでおしまいとし勝ちです。そもそも目の前にあるのですから、そうなるのは当たり前です。私個人も楽しめればそれで良いのだと思っていますが、ただそれに味付けするのがアナロジーだと思います。

事実は真実を見えにくくする、という諺があるそう

です。事実とは実際に起きた事柄や事件等ですから虚偽ではありません。ただ事実イコール真実かという、そうならないことはいくらかもあると思います。一つの事実に厳密であるばかりに大きなところを見失ってしまうという意味でしょうか。これを避けるのがアナロジーの見方だと思います。今回、アナロジー的歴史観を探ろうとしましたが残念ながら、これだという自信のあるものを見出せませんでした。皆様には話の中でほんの少しでもアナロジー的なものを感じ取っていただけたら幸いです。

2. 東北金山 東方見聞録 モンゴル

日本は8世紀から金を産出しました。中国の『宋史』は奥州に黄金あり、対馬に白金ありと記しています。中国からの書籍や美術品は砂金で買っていました。鉱物資源は日本の文化を発展させました。北上川を境に東側の地質は1億年前のもの。当時は深く掘れず砂金を採取します。北上山地で1000ヶ所以上の金山があったようです。その後、隆起と浸食を繰り返して鉱脈が露出、風化して川へ流れました。

奈良東大寺の大仏は当初金色でした。宮城県涌谷町に、百濟から渡来した人物が陸奥守として住み、砂金が出たとして朝廷（聖武天皇）に900両を献上したといわれています。大仏にはこの金が一部使われています。その後、金産地は北へ移り岩手県南部に。東北に金山跡が点在、平泉が黄金の都になります。

このことをベネチアの人、マルコ・ポーロは中国商人から知ります。マルコはフビライに仕えますが、そのきっかけはヨーロッパがモンゴルに侵略され、その後起こる大航海



奈良東大寺の大仏

時代ではイスラムとの争いが顕著になります。その危機感からマルコは東方のことを調べようと中国へと出かけたのです。フビライの要請で、モンゴル周辺地域の聞き取りをし、それが1298年、『東方見聞録』となりました。

印刷技術の向上でヨーロッパにジバング伝説が広まります。絹織物など東洋の文化を知ったヨーロッパはジバングのことが気になりました。東方見聞録には日本は至る所に黄金が見つかるので誰でも黄金を所有し、その富は筆舌に尽くせないと書いています。黄金の屋根、指2本ほどの厚さの金の床等々と。2度の元寇はジバング伝説に根拠があるはずです。日本の鉱物資源が世界規模に浮かび上がったのです。

トルコ系モンゴル人は南下し、世界の5分の3を支配下に置く巨大なモンゴル帝国を形成します。しかし自ら文化を持たなかったため、イスラムの古い文化に吸収されます。侵入したモンゴルがイスラム化したこととなります。イスラム文化はさらに地中海を支配しヨーロッパ・キリスト教文明を圧倒します。モンゴル帝国が陸上貿易を独占したことで、その外側に締め出された人々は新たな利権を求めて海に乗り出します。

日本人と西ヨーロッパ人も海上に進出、海洋国となります。さらにヨーロッパは陸路を切断され、貿易・交易の中心イスラム商人から手に入れていた物資が入らず食糧危機も起きて、アジアへ直接向かわざるを得なくなり、独自に海のルートを開拓します。ここに大航海時代の幕開けが始まりました。モンゴルは日本進攻に2度失敗はしましたが、世界史をつくったのです。14世紀後半からモンゴルは衰退しますが、それでもオスマン帝国のイスラム勢はヨーロッパには脅威でした。

3. 地球2分割

1492年、イベリア半島のキリスト教大国、ポルトガルとスペインはイベリア半島からイスラム教徒を追い出し国土回復運動（レコンキスタ）を成し遂げました。2年後、ローマ教皇は異教徒の征伐と改宗を進めるポルトガルとスペインの事業を支援、キリスト教の布教を拡大していきます。教皇大勅書を出し、両国の支配地域が全地球に及ぶことを確定、ポルトガルとスペ

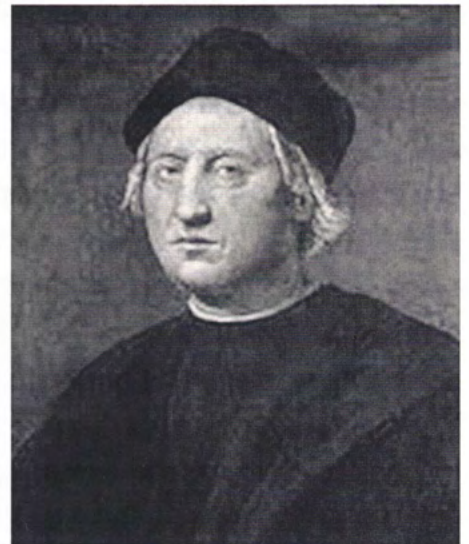
インが地球を2分割するというトリデシリャス条約が出来ます。

アフリカの西海岸付近のベルデ岬近くに線を引き、そこから東側をポルトガル領、西側をスペイン領と決めました。スペインより一世紀早く航海に出たポルトガルは、アジアの殆どを取ります。日本も「ポルトガル国民の征服に属する地」という一文の中に組み込まれました。実際は両国領有の境界線が日本に引かれません。

スペインはコロンブスが発見した新大陸の領有をローマ教皇が認めました。その領域内であれば両国は軍事征服と布教を行い、そして植民地に出来たのです。上陸して国旗を立て、地図に新発見地を加えました。

地球は球体ですからいずれは鉢合わせになります。その場合、出会った時の土地の帰属をどうするかを両国は論争しました。

アジアはポルトガル領とされましたが、1581年スペ



クリストファー・コロンブス

インがポルトガルを併合、フィリピンはスペイン領になりました。フィリピンの国名はフィリップ2世から付いたものです。また北米はスペイン領ですがポルトガルは条約を破りブラジルを領土にしました。このように互いに折り合わず、その後のサラゴサ条約では日本と中国をめぐる両者は譲りませんでした。

日本はちょうど両国が鉢合わせる地点だったのです。両国は競って海外に乗り出し、行く先にある金銀を手に入れました。またアジアに産する胡椒・香辛料は食肉の防腐剤と脱臭剤に使用、そしてヨーロッパを覆ったペストの唯一の医薬でしたから、目の色を変えて獲得しました。世界規模の大航海時代植民地獲得の始まりです。この地球2分割もローマ教皇がイスラム教徒



マルコ・ポーロ

のキリスト教改宗を目指したものです。地中海以東のユーラシア大陸はイスラム勢力です。冒頭のアイヌびとのキリスト教改宗の話にも、どこか通じます。

ジェノバ生まれのイタリア人のコロンブスは同じイタリア人のマルコ・ポーロの東方見

聞録を何度も聞かされてきました。スペインに依頼されたコロンブスも目指すは黄金の国ジパングでした。金銀が狙いだったといいます。後のザビエルも日本の銀山開発を知っての来日でした。ヨーロッパ人たちの新大陸発見の目的の一つが金銀の獲得です。

コロンブスは日本が実際よりずっと東方にあるように東方見聞録には書かれていたため、日本がヨーロッパに近い位置にあると思っていました。しかもコロンブスが見た地図はアメリカ大陸が載って無いものだったようです。1492年アメリカを発見しますが日本と誤認したのです。コロンブスに続いて航海したスペイン人は西インド諸島を征服、有名なピサロがペルーのインカ帝国を滅ぼし金銀をヨーロッパに運んだのはこの時です。ザビエル来日の時期、日本の銀を原資にして中国・東南アジアの産物がヨーロッパに渡りました。その意味で日本の銀は世界を駆け巡ったのです。石見の大森銀山、対馬の生野銀山などが有名です。

ポルトガルは日本を東南アジアの武器市場として組み込み本国の財源にこれを当てました。また日本産の銅がインドのゴアにあったポルトガルの大砲工場に用いられたのです。日本は大航海時代の形成に大きく関わります。ここに布教・貿易・金銀銅の3セットが見えてきます。金銀銅はいくら有っても食することは出来ませんから、用途は貿易・交易に使われます。日本の鎖国時、金銀鉱山開発が盛んであった事は、貿易が盛んであって長崎出島から金銀が流出していたことに

なります。

航海は発見した土地の征服ですが、その先陣役はキリスト教の宣教師でした。ポルトガル・スペインが進出した南米や東南アジアでも宣教師が先に来ます。日本に来たザビエルも同様ですが、先陣役というより純粋に布教目的であったと思います。でもキリスト教に改宗した人と取引しようとする本国国王の意向は酌んでいました。

ザビエルはこの時代に海を駆け巡る、ある種の貿易船・倭寇に便乗して日本に来たのは何か暗示しているのでしょうか。ザビエルが来たもう一つの理由があります。ルターの宗教改革です。このことで誰もが聖書を読むことが出来、司教や聖職者の必要性が薄くなります。カソリック信者が減りました。1000年安住していたカソリックに危機感をもたらします。ザビエルはパリでイエズス会を立ち上げローマ教皇の公認を得て、最強の重商主義国でもあり、カソリック国であるポルトガルの国益に一役買うことになってアジアへ布教に出掛け、日本に来たというわけです。

ザビエルをはじめとしたヨーロッパ人が南蛮貿易を進めます。南蛮人は中国から生糸を日本に運び、日本から銀が輸出されます。日本はキリスト教や貿易を通して世界を知っていきます。日本人は唐や天竺の先に



フランシスコ・ザビエル

文明があることが分かりました。宣教師は布教に好意的な大名とポルトガル商人に取引をさせ、商人に利益をもたらします。一方、大名の方は宣教師を介して入手した軍需物資で兵力を高め、乱世に打って出るという目的がありました。宣教師たちは病院をつくり牛肉を薬として病気を治し外科手術も清潔なやり方でした。炊き出しをして孤児も救いました。このようにして大名も民衆も急速



織田信長

にキリシタンになって行きます。60万人に達したといえます。

ザビエルの後に来た宣教師ルイス・フロイスは信長に謁見、信長がフロイスに対してどのような動機で遠い長い海を渡って来、危険を冒して

まで日本に来たか、と理由を問うと、フロイスは布教のためであり領土侵略を否定する話をして信長は大いに喜んだと、フロイスの書『日本史』の中に書かれています。さらに日本は公衆の平和を乱さない限りキリシタン大名の増加には無関心、キリシタンになった武士は命の尊さと慈悲を知ったとも書いています。

4. 戦国時代のグローバル化

外国人が日本を知ることになったのは先に述べたように外国人が日本のことを書いたことですが、この段では日本人が海外に出掛けることで外国人が日本を知ることになった事例を挙げます。織田信長のように地球儀を見て世界を知り、秀吉はさらに世界を視野に入れた戦略を描きます。海外渡航証明を取った朱印船貿易で豪商や大名は船を東南アジアに出します。東アジア経済圏は世界でも最大で、中でも堺が群を抜く国際貿易都市になります。

この新興市民都市はベニスのものであったと言われます。海外交易に出た日本人が自治制をしいた日本人町がタイ等に20か所生まれます。後に日本人町の人々は帰国を禁止されますが10万人を超えたといわれます。関ヶ原の戦いで敗れた西軍の浪人が海外移民することを徳川家康は奨励します。キリシタン追放で逃亡した者達等もいました。イタリア人航海士と日本人の混血児でキリシタンのジャガタラお春はジャカルタへ追放されます。朱印船に乗った山田長政はタイの日本人町の頭領になりアユタヤ王朝に抜擢され重臣になります。

ただ長政は実在した人物なのか分かりません。

倭寇はこの頃東アジアの中で西日本を根城に朝鮮・中国を含み、特定の国に縛られない海商。国際法のない時代に手段は手荒いことがあっても、国家間の通交に代わって私貿易の主役でした。今般報道された対馬の仏像の帰属先が日韓間で論争になっていますが、この仏像の取引は倭寇も一部関わっています。後になりますが李朝と江戸幕府の公式の外交は対馬を介して朝鮮通信使が往来し、朝鮮出兵以来の国交断絶を解きます。秀吉は李朝に朝貢を求めます。対馬・宋氏は秀吉と李朝に挟まれ難題を担わされますが、朝鮮に倭館を設けて日朝交易で生計を立てます。

ローマ教皇に会いに行った天正遣欧少年使節はイエズス会のヴァリニャーノの発案で、布教の成功をヨーロッパにアピールする目的でした。積極的に海外に関わったとは言えませんが帰国後、秀吉に謁見しミラノ製の甲冑、アラビア産の馬等を見た秀吉は多くの植民地を持つ西洋の君主に憧れ、この時、明国の領有を描いたと思います。



天正遣欧少年使節

キリスト教禁教令が出て少年4名のうち千々石ミゲルは棄教します。ザビエルから90年でキリシタンの世紀は終わりを迎えます。道南の千軒岳でキリシタン106名が処刑、島原の乱と並ぶ北と南の事件でした。秀吉は長崎がイエズス会を通じてローマ教皇のものになり、ポルトガル商人によって日本人奴隷が海外に売られていくのを見て、バテレン追放令を出しますが南蛮貿易をそのまま続けていましたから、言うほど徹底



豊臣秀吉

から、秀吉は明征服でアジアの盟主になろうと思ったでしょう。台湾・マニラ・インドのゴアへ朝貢を求め世界も視野に入れていきます。しかしスペインはマニラ、ポルトガルはマカオ、オランダはジャバに着々とアジア征服の拠点を構え、特にスペインは次に明国を奪おうとします。

明がスペインの手に落ちれば次は隣国日本が狙われると思った秀吉は、先手を打って明に進出しようとし、その先兵を朝鮮に命じましたが朝鮮は従わず、そのことで朝鮮出兵が始まります。来日したポルトガルのイエズス会とスペインのフランシスコ会の反目がありました。フランシスコ会は広大な土地を持ち宣教師や信者を増します。諸国を倒していきます。イエズス会はフランシスコ会の勢力拡大を阻止しようとしています。イエズス会は秀吉にスペインの世界征服の野望を告げま

す。このこともスペインに危機感を抱き秀吉は朝鮮に進出したのでしよう。

時代は少し後になりますが、支倉常長という人も外国人が日本を知る存在でした。日本人が西洋画家によって描かれた最初の人物です。肖像



支倉常長

されませんでした。

スペインから銀灰吹法が伝えられ日本は莫大な銀産出国になっています。明の経済は銀に依存されていました

画の履物は金の草履です。日本への驚きと賛美でした。支倉は伊達領内で宣教師を優遇する代わりに、スペインの船に来てもらって貿易を行い、スペインが支配するメキシコとの直接貿易をしたかったのです。

家康はフィリピンから日本の沖を通してメキシコに向かうスペイン船を見ていましたから、メキシコ貿易は家康と伊達の合同事業でした。家康もスペインの鉱山技術者の派遣を求め、銀の採掘を高めます。代わりにスペインのフランシスコ会の布教を許します。安南（ベトナム）やカンボジアなどにも朱印船は幕府の制度であることを告げています。家康の貿易に対する思いは強かったのです。

伊達政宗は宣教師ソテロの勧めで支倉常長をメキシコ経由でスペイン、ローマに遣欧使節として派遣します。常長は19冊の記録の中にメキシコの商業、スペインの強大な国家の様子を記します。常長一行が帰国した時は、布教を口実に植民地化を企むとしてキリシタン禁教になっておりました。幕府に鎖国を決めたのは、常長がもたらした西洋の情報が大きかったと言えましよう。

それにしても政宗という地方の大名がキリシタン弾圧の動きに逆行して宣教師派遣の依頼をしたのも謎です。常長に同行したスペイン人通訳が編纂した『伊達政宗遣使録』には、常長はスペイン国王に奥州国をスペインの植民地として献上することを約したとあります。宣教師ソテロの書簡にも、政宗は次期の皇帝で、日本の最高実力者だと書かれています。この辺も謎が残ります。常長不在の8年間に家康は亡くなり、政宗の力も弱くなっていました。この間、日本はスペインからオランダの優位性に傾いて行きます。幕府は旗色の良いオランダに付きます。いずれにせよ戦国時代は日本人のグローバル化を一気に高めました。こうして外国が日本を知っていきます。

5. カソリックとプロテスタント

いままでの話の中にカソリック、宗教改革ということが出てきました。キリスト教のことは、この話のメインテーマです。後で出てきますが、ヨーロッパのカソリックとプロテスタントの対立は日本にも持ち込ま

れます。ここでキリスト教のことを整理してみたいと思います。

国際ニュースなどでエルサレムにはユダヤ教の「嘆きの壁」、キリスト教の「聖墳墓教会」、イスラム教の「岩のドーム」が出てきます。旧約聖書には神がアブラハムという男に約束の地（パレスチナ）に行くよう呼びかけたと書かれています。この地をイスラエルの民に与える、と先ず神はアブラハムを選びました。アブラハムはユダヤ人の祖ですが、ユダヤ教がキリスト教とイスラム教を生んでいますので、三つの宗教がアブラハムを自分たちの祖とします。

エルサレムに3宗教が集まる理由です。この3宗教は一神教です。イスラエルの民は神に選ばれたという選民思想、救世主待望、そして終末論を持ちます。ダビデ、ソロモン王の後、イスラエルは北と南に分裂、南イスラエル（ユダ王国）はバビロニアに征服されます。いわゆる「バビロニア捕囚」です。この後ペルシャに解放されてパレスチナに戻り、神殿を再建します。これがユダヤ人の嘆きの壁の基になります。ユダヤ人の中に律法を極端に重んじる人達がありました。ユダヤ人のイエスは律法を守ったか否かは、それほど大事ではなく、神を信じる者を救いたいと論争しますが、律法主義者に処刑されます。そしてイエスは復活する、これがキリスト教の始まりです。

グーテンベルグによる印刷技術の発達で普通の人でも

聖書が読めるようになります。ルターは聖書に書かれていないことは認めず、聖書よりも聖職者が語る説教が重要とするカソリックと対峙します。正しいのは聖書のみ、神父は要らないとしたのがプロテスタントの宗教改革です。カソ



- ・1568年に描かれた印刷所の様子。
- ・一時間に240枚を印刷することができた。

リックは取得した金銀を教会に寄進し永遠の命を保証して貰おうとします。消費をして富の蓄積をしません。

プロテスタントは禁欲的な生活をして富を蓄積します。料理にもその違いが出ます。消費傾向の強いカソリック国のフランスとイタリア料理は美味しく、禁欲的なプロテスタント国のドイツとイギリスはそうでもないと言われます。プロテスタントが拡大し、教会に行かなくなった人が増えた危機感がザビエルを布教に出掛けさせました。またプロテスタントから、さらにピューリタンが出て、この人達がアメリカに向かいます。

6. ポルトガルからオランダへ

前項の話がここで関係します。当時のポルトガルは人口250万人、戦国の日本は1800万人、日本は自力で鉄砲をつくり、ポルトガルが日本に勝るものは帆船技術だけ、植民地を広げ過ぎ、宗教改革で押され気味のカソリック国のポルトガルとスペインは次第に衰退して行きます。代わってオランダが世界の覇権国になる過程をお話しします。

2000年前古代ローマで迫害されたユダヤ人が離散します。ユダヤ人は土地所有が許されなく、職業はキリスト教会が禁じていた金貸し、古物商等でした。神に選ばれた民との誇りから生活習慣を厳格にし、宗教儀式を守って他に同化しません。他国からユダヤ人排斥の風潮がヨーロッパに広がります。フランスにいたユダヤ人は追い出されてピレネー山脈を越えスペインへ。そこでカソリック教会から改宗を迫られます。従わない者は国外へ出て、北アフリカからオスマン・トルコへ。ある者はユダヤ人排斥の傾向があまり無いプロテスタント国オランダに行きます。オランダは信仰の自由を認めていましたから最も多くのユダヤ人がアムステルダムに集まり、才能と資金力を重用され、商業ルートを握って繁栄します。こうしてオランダは覇権国になります。

イギリスも英国国教会をつくってからはユダヤ人を敵視せず、ユダヤ人の定住と商業を許します。このことはイギリスの繁栄の一つでもあり、後に近代化する日本とも結びついていきます。

17世紀前後、イギリス、オランダなどはアジア貿易を目的に東インド会社を設立します。インドとは未開という意味で、東インドの中に日本も入ります。商人が国王や議会から貿易の独占を特別に許される会社です。ですから所謂近代はここから始まったと思います。アジアの富を目的に会社が外国に領土を持ち、そこを統治する根拠地にします。幕府はキリスト教を禁圧しましたから、オランダは布教をしないと、自己ピーアールして貿易の継続をして行きます。

関が原が始まる半年前、1600年4月、オランダ船で豊後に漂着した英国人ウィリアム・アダムスは家康に謁見します。新旧教同士の30年戦争があって、オランダはスペインから独立しますが、この争いのミニ版が日本でもありました。アダムスは、スペインは領土拡張のため布教を利用している、と告げ、宣教師たちの国外追放を勧めました。幕府はスペインを退け、オランダを受け入れて行きます。家康はオランダ側のウィリアム・アダムスを重用します。

アダムスは西洋の大砲・武器・船等を家康に提供、関が原に勝ちます。三浦半島の水先案内人ということから三浦按針と命名しました。按針は水先案内のこと。家康は按針を外交顧問にし、旗本にします。オランダ商館を平戸から長崎に移します。こうしてあのオランダ出島が出来たのです。家康が受けた按針の忠告が、スペインとポルトガルへの排撃につながります。

島原の乱では幕府の依頼でオランダがキリシタンを



三浦按針
(ウィリアム・アダムス)

砲撃します。日本においてもオランダは商業の国で政治的野心がないと理解されます。新井白石は、オランダはヨーロッパでは肩を並べる国はない、商売はすべて軍事のため、という国だと言っています。白石はキリスト教の本を3冊読破、外国でつ

くられた道徳と考え、洋学を勧めます。

7. 江戸時代農村の貨幣経済

近代化の波に乗って来る外国の勢力は、その交渉相手国も近代化となっていなければならず、キリスト教が先に入って来たのもその一つです。冒頭でお話した官寺はその防壁でした。統治する側は相手側の為政者が近代化されていることを望みます。封建社会では農業が主な産業、人口の8割が農民、農業技術が進歩すると時間の余裕が出て、副業的な手工業産品が作られ農民はそれを都市に売りに行き、そこに商人が買いに来ます。ここに商品経済が生まれます。

商人は農民に金を貸し、商業資本が出て来ます。一方、武士も決まった時期にもらう蔵米を受け取って、それを領地まで何十俵も運ぶのを止め、札差が変わって受け取って金に換えて武士に渡す。旗本には禄米を担保に金を貸します。この状況は秀吉が兵農分離をしたことによって、城下町が市場になり、都市生活者になった武士が消費者になって、生産者・農民とはっきり分かれたことにより、米を金に換えなければなら無くなりました。

秀吉の時代に商品経済の萌芽があったのです。武士と農民が一体となっていた土地経済が、今度は商品経済に変わったのです。米相場の上げ下げは町人の手にありました。幕府上級職の田沼意次には武士に見られる、金は賤しい物という思想はなく、賄賂政治は武家が商業資本と共存しなければ成立し無くなったことを、いびつな形で示しています。このように武家は日本経済の担い手の農民や町人のまとめ役に過ぎないものになって行きます。

江戸期日本の状況を外国で本が出版されます。ドイツの旅行家ケンペルは東インド会社の医官として長崎に到着、大阪の水路の商取引の利便性や商業の様子、貧民が現れる西洋の都市と違い平和で文化的な日本を賛美した『日本誌』を出版します。英国人スウィフトが書いた『ガリバー旅行記』は架空の物語ですが唯一日本だけが実在の国として描かれます。ラグナグ王国に着き、日本に寄って首都エドを知り、長崎へ行くまでのことを書いています。

ガリバーはオランダ人として来ています。オランダ人だけが入国出来ることを知っていました。『ガリバー旅行記』は日本が経済的に繁栄していることを西洋に伝えました。1726年出版、3週間で1万冊のベストセラーでした。ドイツ人のシーボルトはオランダ商館に医官、科学調査官として派遣されましたが帰国の際、禁製の地図が見付かり機密漏洩事件に発展、国外追放になります。江戸城の奥の奥を手取るように知る本丸の配置図をはじめ、間宮林蔵のカラフト計測図等、木箱にして数百個が送り出されていたそうです。シーボルトは間宮と交流があり、北方探検を褒めています。

カラフトが大陸と離れていることを知り驚いたと言います。後に『日本』を出版、自著をニコライ一世に売り込んでいます。オランダのライデンにアジア関連資料の収蔵庫があり、ペリーもシーボルトの日本関連情報を集めていたと言われます。ハンガリー人のベニョフスキーはロシアの捕虜を経て阿波の国に漂着、オランダ商館あてに手紙を書いて、ロシアが千島を攻撃し領土を拡張していると警告しています。これを幕府が聞き海岸防備を始めます。ベニョフスキーの回想記風旅行記が1790年英訳されヨーロッパに広がります。書籍によってヨーロッパは日本を知って行きます。

16世紀はスペインとポルトガル、17世紀はオランダが世界の覇権国でしたが、次の17世紀後半はオランダに代わってイギリスが覇権国になります。寒冷期があって世界の生産は毛織物産業に集まります。オランダの風土は羊の生育に適さないという地理的要因がありました。イギリスは牧草が育つ土地で羊を飼い、その土地を出た農民は都市に流れて毛織物工業に従事します。後にピューリタンとなるカルヴァン派の人々の倫理観は禁欲的に富を蓄積して行きます。イギリス東インド会社という一見平和な株式会社の形を取り、軍事力と経済力を背景にインドや東南アジアに市場や原材料を求めます。後の幕末の日本では最も重要な関わりを持ちます。オランダが幕府に「アヘン戦争で勝ったイギリスが日本に開国を求めて来る」と告げています。

この頃の世界通貨は銀でありました。中国は銀で取引し、後で述べるアヘン戦争が起こります。その銀の供給源はヨーロッパと日本でした。イギリスは貿易で手に入れた銀を投資に回し経済成長につなげます。そ

して中国の絹、茶、香辛料を輸入し見返りに銀で支払います。こうした頃日本は鉱山史上最も金銀銅を産出し中国の茶器や絹織物を銀で支払っています。

8. ピューリタン

英国のヘンリー8世が1534年、イングランド全教会をローマ教皇から独立させます。理由の一つは国王の離婚をローマが認めず、それに反発したこともありました。英国国教会が成立しイギリスはプロテスタント国になりますが、そこからピューリタン（清教徒）が分かれます。ピューリタンは、人は皆罪深い、神の助けが無ければ滅びる、だから禁欲的に清く生き、神に全てを捧げると考える信仰は、英国国教会との戦いになり、彼らはオランダに逃げて1620年メイフラワー号でアメリカに来ます。

彼らには「約束の地」という考えがあります。モーセがエジプトを脱出してパレスチナに行くのと似ています。その前に英国王はアメリカの植民地経営を任せる特許状を会社に与えアメリカに入植させます。日本で言えば南満州鉄道会社です。その自治政府は税金などのことで本国と揉め、英国からの独立戦争になります。フランスは植民地争奪戦で英国と争った経緯からアメリカ独立派を支援します。

ここに幕末時、英は薩長、仏は幕府にと別れる底流があります。ピューリタン達が西部開拓へと向かうことになったのは、当時のアメリカを示す言葉で「明白な運命」にあります。神によって与えられた大陸を太平洋岸まで領域を広めての西部開拓は神の意志であるという考えです。鉱物資源の探査・調査も加わって、勤勉、禁欲的ピューリタン精神はフロ



内村鑑三

ンティア精神になり西へ西へと向かいます。禁欲主義は富の運用を正しいものとし、労働の収入は神の褒美として蓄財を認め、禁欲はさらに蓄財を増やします。神の国をひたすら求めその拡張を目指します。

内村鑑三はアメリカ建国を評価します。移住植民政策を神の摂理であり文明発展史観の要と考えます。内村は欧米キリスト教社会を文明、近代化を遂げていない異文化の国々を未開・野蛮と捉えました。ですから指導して発展させる植民政策は正当でした。

しかし帝国主義時代の世界情勢の中で非戦論を唱えていた内村は理想的植民を見出せなく挫折します。キリスト教文明発展史観への疑念が聖書の原理主義、終末論、悪魔との闘い、地上の天国論に傾斜して行きます。今日のアメリカ社会の一部にある凄まじいまでの世界展望があるのは、このような終末観があるような気がしないでもありません。

9. アヘン戦争

中国茶の需要が英国本国で高まります。膨大な量の茶を買うために膨大な銀が流出しました。英国は税収入の源になっている茶の輸入に支障をきたしたくなく、支払った銀を取り戻す目的で、インド栽培のアヘンを中国に売り込み銀で支払わせました。

中国から大量の銀が流れ出しました。流出した銀については、箱館でも銀不足に対処する商人たちがいました。松前場所請負人をし、その後箱館に来た杉浦嘉七は五稜郭築城に物資を調達した豪商です。国際港に



イギリス海軍軍艦に吹き飛ばされる
清軍のジャンク船を描いた絵

なった箱館で洋銀取扱所を設立して銀不足解消に努める様子が『願乗寺川物語』（木村裕俊著）の「杉浦嘉七編」に述べられています。銀の価格が2倍になり、銀を巡って英と清国が争います。

さらに中国の財政が脅かされた上、アヘンの害が著しくなって、アヘン戦争が起こります。反英感情の高まった第二次アヘン戦争でイギリスは疲弊します。戦争後、鎖国政策をしていた中国の開港地が上海のほか5港に広がり、貿易拡大が期待されていきます。

10. アメリカのカリフォルニア併合

この頃アメリカはメキシコとの戦争でカリフォルニアを編入、西海岸に長い海岸を持つようになります。東アジアと西ヨーロッパの中間に米国があり、米国を横切ると最短になります。だがアメリカは建国以来西洋の植民地争奪に巻き込まれない孤立外交でした。

市場が広大であり本国だけで経済が成立、他国に干渉しない、介入しないというモンロー主義でした。ところが同地で金鉱発見、30万人移動のゴールドラッシュになって、カリフォルニア海岸一帯が賑わい、サンフランシスコは太平洋岸の商業の中心になりました。この海岸から太平洋が広がって見えました。太平洋航路が視野に入っていきます。産業革命も進んで綿製品の輸出先として太平洋の先にある中国に着目、中継地点として日本の港が論上上がります。

ニューヨークからパナマ、サンフランシスコ、アリューシャン列島、千島、日本列島を通過して上海に至る途上の港です。しかしロッキー山脈を越えなければならない、鉄道はない、パナマ運河はない、今までの最短が喜望峰を回ってインドから日本へというものです。実際ペリーはこの東回りでしたが、この時既にペリーには箱館港が頭にありました。津軽海峡はアメリカ西海岸から太平洋と日本海を最短で結ぶ唯一の海峡であり上海までのシーレーンになります。

箱館に決めたのは地政学上ロシアに対して存在感を示す役目を担え、要塞都市のような地形で、少しも風が当たらない世界無比の港であり、土壌は肥えていて鶏肉、卵、野菜の補給が出来るとしています。もう一つの候補地・松前はアイヌびとを媒介にロシア人と取

引があって、そこではロシアとの摩擦が生じると思っています。こうしてペリーは箱館に来たのです。

11. ペリー来航 ハリスの自由貿易

前項で述べたように単純に捕鯨業のために日本を開国させたわけではありません。その頃蒸気船燃料に石炭を用いる動きが出て、ペリーは沖縄に寄って石炭を調査、質の劣る亜炭を発見しています。10年後に石炭が世界のエネルギーになります。

しかしペリーが来航した最大の目的はキリスト教を広めることだったと思います。1856年ペリーの米の地理学会での演説に、非キリスト教徒に神が示された真理を知らせ、人類を進歩させる、日本をキリスト教文明の恩恵に浴させることこそ歴史的使命であると話しています。

ペリーは書物から日本を研究、鎖国は国民の特性ではなく、過去の事情であり日本の気風に反していたとしています。先に述べたように、アメリカには神によって与えられた地を太平洋岸まで領域を拡大するのは「明白な運命」であるという考えがあり、ペリー来航はその延長線上にあったと考えます。

図式にすると、プロテスタント→禁欲主義→神の偉



マシュー・ペリー

大さ→人間の罪
→労働→フロンティア→開発→金鉱→カルフォルニア発展→商業都市→低賃金労働力→中国→津軽海峡まで至り、箱館に来たと思うのです。

所謂安政の5か国条約の締結

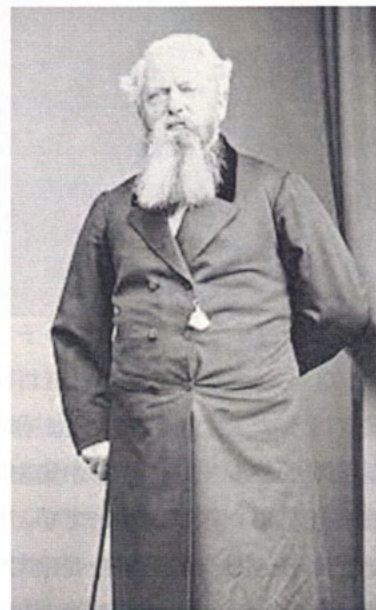
がもたらした結果、外国人主導で事が進みヨーロッパ人が大きな利益を獲得、日本から金が流出します。この頃から銀の相場が落ち、江戸では金が重視されます。幕末日本の金と銀の価格比が1対5でしたが、国際的には1対15、外国商人が大量に銀を持ち込み、代わり

に3倍の価値がある金貨を持ち出して行きます。金が無くなり品質の低い小判を改鑄してインフレを起こし、物価高になって攘夷思想が起こり、幕府が崩壊します。結局開国をしたことで幕府を崩壊させますが、開国後でも幕府は続く可能性はあったのでは、という疑問が残ります。大政奉還で天皇に政権を返しても徳川が次の位置にいることが可能だったと思います。それを許さず王政復古になりました。

なぜ英は薩長を支援し、私は幕府についたのでしょうか。イギリスからアメリカが独立した戦争の時フランスはアメリカ独立派と共にイギリスと戦いました。自由の女神像はフランスから贈られました。英と私は対立していたのです。薩長は薩英戦争などで攘夷を捨て、英も崩壊寸前の幕府を見限り薩長を支援します。私は貿易の独占を狙って幕府に加担します。この英と私の対立は薩長と幕府の対立になり、日本国内乱を一層加速させたのではないのでしょうか。

米国の南北戦争は南軍が北軍の連邦政府から独立しようとした争いでした。このことで米国は外交に手が回らなくなり、維新後の日本は日本を開国させた米国から英国主導になっていきます。箱館に米国領事館が建てられなかった理由です。

米国初代公使・ハリスは不平等条約の下、自由貿易を進めましたが、彼の著『日本滞在記』の中でこのようなことを言っています。日本という野蛮な国をキリスト教の感化によって文明国に引き上げる使命感を持っていた、ところが接するうち富者も貧者もない、幸福そうである、日本を開国させ外国の影響を受けさせることが幸福にすることが疑わしい、自分の信じるキリスト教が全てではない、と回想しています。



タウンゼント・ハリス

12. 五箇条の御誓文

海援隊のいろは丸は紀州藩の明光丸と衝突しましたが、坂本龍馬は明光丸が見張りを立てず、航海日誌をつけてなかったことは「万国公法」に反するとして賠償金を取りました。

いわば後の国際法で処理しています。万国公法は清国で宣教師をしていたアメリカ人が漢文訳で刊行しています。条文ではなく協定などを要約したもので、原著はアメリカのホイートンです。日本人で万国公法に着目したのは越前福井藩の三岡八郎（由利公正）と推測されます。

三岡は龍馬の「船中八策」の共鳴者、五箇条の御誓文は船中八策が基になっていることは知られています。御誓文の第四条の中にある「天地の公道に基づくべし」という言葉の原案は三岡です。天地の公道は「古くからの仕来りにとらわれず、世界に共通する道理に基づいて行動し、新しい国家をつくろう」という意味で万国公法のことです。龍馬はいろは丸事件で万国公法を適用しました。



坂本龍馬

だ、としたためていました。今までには無かった新国家というフレーズに注目が集まりました。龍馬が万国公法を知ったのは勝海舟です。後に勝は自費で刊行します。イギリスの支援を受けて倒幕した新政府は「五箇条の御誓文」で攘夷を捨てます。勝、龍馬、三岡の3人が「新国家」というフレーズで繋がる人物に、米

今年1月13日北海道新聞記事には、龍馬が暗殺5日前、福井藩重臣に宛てた手紙が発見されたと高知県が発表、とあります。手紙には龍馬が福井藩士・三岡八郎を新政府に出仕させるよう訴え、新国家に必要な人物

でしょうか。

13. ジョン万次郎

万次郎は箱館に来ています。幕府から諸術調所で捕鯨技術の講師役を依頼されます。ところが万次郎の身分は元々が漁民という理由で講習を受ける者から拒まれ、3日間で帰ります。漂流して米国船に救助されますが、ちなみに『八丈島史』によると1474年～1865年まで390年間で八丈島に漂着した船は109隻ということです。帰国するまでアメリカでは相当高度な教育を受けています。

アヘン戦争では日本の植民地化を懸念し、帰国して鎖国を止めさせようと考えます。帰国費用の捻出でサンフランシスコの金鉱堀を数か月間します。24歳で薩摩に上陸、1851年



ジョン・万次郎（中浜万次郎）

ですからペリーより先に来ています。島津斉彬、長崎奉行が尋問、英語ができる人材として扱われます。万次郎の話の聞き書き役をした河田小龍が記録したものを海舟も龍馬も読みました。アメリカから帰国しての開国主張ですから、当時の情勢からすれば色々な波紋を呼んだに違いありません。

（おわりに）

江戸時代の身分社会は職制身分社会でした。その職制間では、ひとつの均衡を保っていたと思います。各自の職制の中の生涯に、ある種の諦念を抱くことで生活に意味を見出し、心の落ち着きがあったと思うのです。庶民から武士になることが出来ても、武士になりたいとは必ずしも思わなかったのです。

身分制に生きた人々が、平等の下で生活する私達より不幸であった、と片付けられるのか疑問です。私たちが嫌いな身分制ですが、本当のところはどうだった

のでしょうか。近代が獲得した最大のものは平等と国際化です。人々は近代に憧れました。いま現代人の生活を便利なものにしてあります。ですから近代を否定することはできません。しかしながら平等は私たちを自由にしてくれたのでしょうか。

世界史を追っかけて近代が成り立つ過程まで来ると、近代への抵抗感といったものも出てくるものです。近代がもたらした恩恵を私たちは沢山受けていますが、近代・民主主義はどうしても軍事技術を発展させます。王権、貴族がいけないことと無関係ではありません。王権、貴族がいればそれ程、軍事に頼らなくても秩序は保てるという何とも変なジレンマがあるのです。平等は一斉に「よーい・ドン」でスタートする、誰もが疑わない当たり前の社会規範になっています。しかし一方で平等は果てしない競争を続け、その結果、野望と妬みがどこまでも続くのではないかと思うのは心配のし過ぎでしょうか。野望と妬みを生むからと言っても平等には代えられない、という意見には敵わないことは分かっています。でも平等を建前とする現代社会は組織の上下関係は今なお厳しいのです。

幕末に来た欧米人は日本人の上司が部下に気を配るのを見て驚いたといえます。もともと江戸時代の身分制は職業区分だったと思います。現代でも各職業人に大きな重味を社会が持たせることで各職業人の間が結果として平等感を持つことが出来るかもしれません。こうした近代とは違う、「もう一つの近代」は何処かに無いのでしょうか。多分無いのでしょうか。いや、そんなものはあり得ないのかもしれませんが。でも頭で思い描くことは出来ますし、そのことで心の落ち着きを持てるかもしれません。

夏目漱石は外圧によって国を開いた歪みについて講演で述べています。ペリーの来航後は日本の自己本位の能力を失って外から無理やり押されて、その言う通りにしなければ立ち行かないという有様になった。器械的に西洋の礼式などを覚えるより仕方がない。自然と醸された礼式でないからはなはだ見苦しい。だからと言って止めるわけにはいかず、涙を呑むしかない、というような内容を話しています。さらに、西洋の一神教は戦わざるを得ない。日本は天＝自然にまかせればよい。近代というものを美化してはいけない、とも

言っています。

最後に本日のテーマであります「世界史の中の箱館」を文字通り語る建物があります。明治13年の旧金森洋物店（郷土資料館）をはじめとする和洋折衷もしくは擬洋風建築群です。2階が洋風窓、1階が格子戸です。なぜこうなったか理由は2つあるようです。ひとつは開港以来、箱館の狭い土地に密集して建てざるを得なくなり、レンガ耐火建築を敷地いっぱい建てると1階は自ずと引き戸になるという説。もう一つは港に入ってきた外国人が船上から街並みを遠望する時、町屋の2階が洋窓であることで親しみを感じさせる狙いがあったという説。後者の説にはハーバー遭難事件も加わるかもしれません。

明治7年、ドイツ代弁領事・ハーバーが元秋田藩士に斬殺された事件がありました。この時期でも極端な攘夷思想を持った人物でした。下船する外国人に対して洋窓のある街並みを見せることで不安を解消させたかったのかもしれませんが。この全国でも例の無い土蔵造りで2階洋窓、1階格子戸という風変わりな建物群。特に金森洋物店は一見異様とさえ言えます。これら町家の所有者、彼ら同時代の商人はいずれも江戸時代の生まれです。外国貿易に対する商魂と江戸時代生まれの和魂との間で心の揺れを止められず、辛うじて1階を格子戸にしたかったのでしょうか。これらの建物が遺る限り、「激動の世界近代史の中の箱館」が風化することはないでしょう。



旧金森洋物店
(函館博物館、郷土資料館)

平成28年度の主な事業（報告）

1. 「友の会通信」・「友の会会報」の発行

- (1) 友の会通信 第43号（平成28年11月16日）、第44号（平成29年3月5日）
- (2) 友の会会報 第65号（平成29年3月31日）

2. 例会・講座等の開催

- (1) 講演会（総会終了後に開催）平成28年5月28日（土）14時00分～15時00分
演題 「道南十二館時代の謎」 会場 五島軒本店 参加者32名
講師 市立函館博物館友の会 理事 木村 裕俊 氏
- (2) 道南の博物館等施設めぐり
木古内町・福島町の歴史散歩 平成29年7月1日（金）参加者18名
木古内町郷土資料館（いかりん館）、佐女川神社、新幹線木古内駅・構内
横綱記念館、青函トンネル記念館
- (3) 市立函館博物館特別展の見学会
テーマ 「市立函館博物館五十年 函博コレクション」平成28年8月26日（金）参加者13名
解説者 市立函館博物館 学芸員 佐藤 理夫 氏、奥野 進 氏、保科 智治 氏、
小林 貢 氏
- (4) 会員発表会
平成29年3月25日（土）13時30分～15時40分 会場 五島軒本店 参加者23名
テーマ「世界史の中の箱館」発表者 理事 吉田 豊 氏

3. 博物館事業の後援・協力

- ・企画展「市立函館博物館五十年 函博コレクション」「新収蔵資料展」・博物館講座等の後援など

*友の会事務局が移転しました。（平成29年4月1日移転）

〒040-0053 函館市末広町21-12 電話／ファックス 0138-27-3344

勤務日は、毎週火曜日と金曜日の午前9時00分～12時00分まで

（勤務日が祝日の場合は、火曜日を水曜日に、金曜日を木曜日に変更する）

現在、次の企業・団体から協賛をいただいております。改めてお礼申し上げます。

- ・(株)エスイーシー ・金森商船(株) ・(株)建築企画山内事務所 ・(株)五島軒 ・五稜郭タワー(株)
- ・(株)佐藤一郎建築設計事務所 ・(有)三和印刷 ・(株)千秋庵総本家 ・(財)相馬報恩会 ・名美興業(株)

（敬称略・50音順）

市立函館博物館友の会会報 No.65

発行所 市立函館博物館友の会

印刷所 (有)三和印刷

電話 0138(45)0845

平成29年3月31日 発行

〒040-0053 函館市末広町21-12

電話 0138(27)3344

振替口座 函館02650-0-2216